



Data	
監督:	モルテン・ティルドゥム
脚本:	グレアム・ムーア
出演:	ベネディクト・カンバーバツ チ/キーラ・ナイトレイ/マ シュー・グード/チャール ズ・ダンス/マーク・ストロ ング/ロリー・キニア/アレ ン・リーチ/マシュー・ピア ード/アレックス・ローサー /ジャック・バノン/タベン ス・ミドルトン

## 👁️👁️ みどころ

『暗号機エニグマへの挑戦』を原作とした映画『エニグマ』（01年）も面白かったが、実在した天才数学者アラン・チューリングの伝記を脚色した本作も実に面白い。暗号解読はゲーム。それがアランの持論だが、そんな変人をよく暗号解読チームに招いたものだ。

暗号解読成功までの前半のストーリーも波瀾万丈だが、後半の意外な展開はもっと面白い。ゲームが騙し合いなら、戦争における情報戦は究極の騙し合い。それを痛感するはずだ。

「普通でないことの価値」をしっかりと確認しながら、アカデミー賞作品賞等の受賞確実と思われる本作に見る、アランのもう1つの秘密にも踏み込んでみたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□「エニグマ」と聞けば、こりゃ必見！■□

あなたは「エニグマ」と言う言葉を知ってる？日本では、一昨年（平成25年）の12月6日に成立した特定秘密保護法が昨年12月10日に施行されたことや、それに反対する大きな世論があることを知っていても、第2次世界大戦中にドイツ軍が誇った、暗号システム「エニグマ」のことを知っている日本人は少ないのでは？そんな日本人には、マイケル・アプテッド監督の『エニグマ』（01年）は必見の映画だった（『シネマ3』240頁参照）。同作でも、ロンドンの北97キロにあるブレッチリー・パークにあったという、暗号解読本部（チーム）がポイントだったが、それは本作でも同じだ。

映画冒頭、ノック刑事（ロリー・キニア）が登場して、何やらクソヤやこしい問答（？）

が続いた後、スクリーン上は1939年に移り、「世界一の数学者」を自負するアラン・チューリング（ベネディクト・カンバーバッチ）をアラスデア・デニストン中佐（チャールズ・ダンス）が暗号解読チームに入れるか否かについて面接するところからストーリーが始まっていく。頭の固い軍人と、天才数学者ながら世事に疎い変人のアラン。そんな2人の会話がまともにかみ合うはずはなく、この面接はダメ。そんな結論が出そうになった時、アランの口から出たのがエニグマだ。

なぜ、一介の民間人がそんな言葉を知ってるの？そこからさらに話が進んでいくと、何のことはない、アランは自分の任務がエニグマの暗号解読にあることを既に予見していたから、すごい。

## ■□■天才数学者を演じた俳優が主演男優賞にノミネート！■□■

本作は必見！そう思って試写の日程をキープしていたが、その直前の1月15日に発表された第87回アカデミー賞で、本作は作品賞、監督賞、主演男優賞、助演女優賞、脚色賞、編集賞、美術賞、作曲賞の計8部門にノミネートされた。そのこともあって、試写室は満席だ。

暗号解読チームに集うメンバーは、リーダーとされたチェスのチャンピオンであるヒュー・アレグザンダー（マシュー・グード）や、後にソ連の二重スパイであることが明らかにされる某氏ら数学の天才ばかり。しかし、本作で天才数学者アランを演じて主演男優賞にノミネートされた長身の俳優ベネディクト・カンバーバッチが演じるアランの変人・奇人ぶりと、社会への適応性の無さはすごい。そのうえ、本作後半からは、彼が同性愛者であるという、何とも皮肉な真実まで明らかにされるから、アラン役を演じる俳優は大変だ。さらに、ラスト近くでは同性愛の罪で有罪とされ、刑務所に入るかそれとも女性ホルモンの投与による去勢の保護観察をうけるかの二者択一権が与えられる中、研究を続けるために喜んで後者を選択し、フラフラ状態（？）で研究を続けているアランの姿すら登場するから、さらにすごい。『寒い国から帰ったスパイ』（65年）的な雰囲気英国諜報部「サーカス」による、リアルなスパイ戦を描いたトーマス・アルフレッドソン監督の『裏切りのサーカス』（11年）では、ベネディクト・カンバーバッチは「サーカス」のスカルプハンター（実動部隊）の1人、ピーター・ギラムを演じたにすぎなかった（『シネマルーム28』114頁参照）が、本作の天才数学者役で彼のアカデミー賞主演男優賞は確実？！

## ■□■助演女優賞は？作品賞は？その他は？■□■

他方、助演女優賞にノミネートされた私の大好きな美人女優キーラ・ナイトレイは、クロスワードパズルの天才ジョン・クラーク役に扮して暗号解読チームに入るが、もちろんチーム内の女性は彼女一人だけ。チーム内がもつれはじめた状態の中で、エニグマ解読のためただ1人「クリストファ」と名付けた奇妙なマシン（現在のコンピューター）の開

発に取り組むアランに対して、協力の大切さとその価値を教えたのが彼女だが、アランとジョーンとのおよそ世間にはあり得ない面白い会話も、本作の見どころになる。その大半は暗号解読のためのものだが、少しは男女間の会話もある上、何とこの2人は婚約してしまうから、そのストーリー展開にも注目！

また、エニグマ解読までの苦労が本作前半のストーリーになるが、本作はそれに終わらず、暗号解読後のストーリー展開も意外性がある面白い。アランが開発したコンピューターのおかげでエニグマの解読に成功した結果、ある船がUボートに囲まれており、30分後に攻撃を受けることが判明。ならば、すぐに軍に連絡を取り、現場に攻撃機を飛ばしてUボートの攻撃を。多くの意見はそうだったが、それを押しとどめたのがアラン。アランの説明を聞くと、兄がその船に乗っているという1人を除いて、全員がアランの意見に納得し、さらに続く困難な任務に就くことに。しかし、それは一体なぜ？

アランの内面をトコトンつきつめていく後半のすばらしい展開をみれば、本作が作品賞や脚色賞、編集賞にノミネートされたのも当然だし、受賞も確実？！

## ■□■50年間隠し続けた国家機密とは？■□■

日本では特定秘密保護法が昨年12月10日に施行され、現在、何を特定機密として取り扱うか？のための議論が進められている。朝日新聞をはじめ多くの識者がこれに反対を唱えているが、本作にみる英国政府が50年以上隠し続けた国家機密とは・・・？『エニグマ』は、1995年にイギリスで出版されたロバート・ハリス著のベストセラー『暗号機エニグマへの挑戦』を原作とした映画で、暗号解読本部に呼ばれる主人公の名は、トム・ジェリコ（ダグレイ・スコット）だった。

しかし、「BASED ON A TRUE STORY」と冒頭に字幕表示された本作は、アンドリュー・ホッジスが書いたアラン・チューリングの伝記にもとづくものだ。プレスシートによれば、2009年に「英国のブラウン首相が政府を代表して」「第2次世界大戦後のアラン・チューリングの扱いに対して謝罪した」というニュースを聞いた、ノラ・グロスマンとイド・オストロフスキーという2人のプロデューサーが、アンドリュー・ホッジスの書いた「チューリングの伝記」を読んで、世にほとんど知られていない数学者の数奇な人生に驚き、その映画化を企画したらしい。そして、チューリングを「スティーヴ・ジョブズやビル・ゲイツからも崇拝されるコンピューターの初期の発明者」だと敬愛していた若きグレーム・ムーアと意気投合し、彼が脚色を手掛けることになったらしい。

しかし、2009年にブラウン首相は、アラン・チューリングへの、どの扱いに対して、どのような謝罪をしたの？そして、英国政府が50年以上も隠し続けたという国家機密とは・・・？

## ■□■あれこれの変人・奇人を考えてみると・・・■□■

暗号解読チームのリーダーとなったチェスのチャンピオン、ヒューも本当はかなり変わ

った人物だろうが、アランの変人・奇人ぶりを見ていると、ヒューは普通の人に思えてくる。かつて、将棋の米長邦雄王将は、「兄達は頭が悪いから東大へ行った。自分は頭が良いから将棋指しになった」と発言していたから、かなりの変人？

また、私が将棋を始めたのは中学に入ってから（1962年頃）で、その頃は「宿命のライバル」と言われた大山康晴VS升田幸三の時代だったが、そこでは天才・升田幸三の変人・奇人ぶりが有名だった。もちろん、大阪が生んだ将棋の天才・坂田三吉も実際はともかく、北条秀司の戯曲『王将』（52年）で描かれる人物像や、村田英雄が歌った名曲『王将』で描かれる人物像はかなりの変人だ。

織田信長の変人・奇人ぶり（天才ぶり？）も含めて、そういう変人・奇人こそがよく世の中の大きな変革を成し遂げるのだ、ということが本作前半のエニグマ解説に至るストーリーを見ているとよくわかる。



© 2014 BBP IMITATION, LLC レイティング G  
TOHO シネマズ梅田、TOHO シネマズなんば、あべのアポロシネマ、TOHO シネマズ二条、MOVIX 京都、  
OS シネマズミント神戸、TOHO シネマズ西宮 OS ほか

## ■□■「普通でないことの価値」をしっかりと確認しよう！■□■

『危険なメソッド』（11年）では、口をゆがめ顔を引きつらせながら叫びまくるヒステリー患者役を熱演した美人女優キーラ・ナイトレイ（『シネマルーム29』121頁参照）が、本作では暗号解説チームの紅一点ジョーン役として奮闘する姿が描かれる。このジョ

ーンもアランに比べるとまだまともだが、かなりの変人であることがその会話を聞いているとよくわかる。日本では、一般的に普通であること、世間並みであることが大切で、そこからはみ出ることに対する嫌悪感が強い。大阪弁護士会における弁護士・橋下徹もそうだし、政治の世界における大阪市長、大阪維新の会代表・橋下徹も、一方ではその突出ぶりが評価されても、他方ではそれが嫌われている。自らを「暴走老人」と称していた石原慎太郎・前東京都知事も同じだ。そんなことをいろいろ考えながら、本作におけるアランやジョーンの「普通でないことの価値」をしっかり確認したい。

もともと、女性であるという特性から逃れることはできないため、親から「結婚のため実家に戻ってこい」と言われると、ジョーンはそれに従わざるをえなかつたらしい。それはある意味あの時代の制約だが、それを阻止するためにアランがとった行動は、自ら結婚相手になるという「奇手」。それは一部ではアランの本心に沿ったものだったが、他方でアランには「同性愛」という当時の法律に反する秘密があったから、アランはその気持の整理をどのようにつけるの？エニグマ解読に向けての天才数学者としての変人・奇人ぶりは大いに結構だが、同性愛は今でこそOKだが当時は犯罪だから、その方面における変人・奇人ぶりはちょっと問題かも・・・。

## ■情報をいかに扱うの？ゲームは騙し合い■

『エニグマ』では、「エニグマ」によって打電されていた1943年4月に起きた「カチンの森の大虐殺」をめぐる情報戦が1つのテーマになっていた。この「カチンの森の大虐殺」は、アンジェイ・ワイダ監督のポーランド映画『カチンの森』（07年）によって有名になった（『シネマルーム24』44頁参照）が、これは1992年にソ連のゴルバチョフ書記長によって明らかにされた歴史上の事実だ。第2次世界大戦の最終局面では、連合軍が敢行した「ノルマンディ上陸作戦」の成功が大きなポイントだが、連合軍がいつ、どこに上陸するかをめぐっては、ものすごい情報戦が展開された。そのことは『史上最大の作戦』（62年）等で明らかだ。また、本作ではエニグマの解読によってドイツのUボートによる輸送船攻撃計画が明らかになった後、その情報をどのように扱うかが次の大きなテーマになっていた。

ポーカーは一種の騙し合いだが、それはチェスも将棋も同じ。ゲームでは「読み」の正確性はもちろん大切だが、騙し合いの要素を必然的に含んでいる。したがって、アランが暗号解読を「ゲーム」と捉えていたのは正しいし、ジョーンがクロスワードパズルに強いのは、騙し合いに強いということだ。したがって、エニグマ解読までの努力が騙し合いのゲームなら、解読に成功した後の暗号解読チームの任務ももっと大きな騙し合いになっていったのは当然だ。

## ■戦争における情報戦は究極の騙し合い！■

そんな視点から見て面白いサブストーリーの1つが、ソ連の二重スパイの存在。一時はデニストン中佐からアランが二重スパイだと疑われたが、アランが頑強に否認したとおり、アランがそうでなければ、二重スパイは一体誰？もう1つ、「騙し合い」というテーマで面白い人物は、MI 6のスチュアート・ミンギス（マーク・ストロング）だ。デニストン中佐は頭の固い海軍軍人にすぎないが、このミンギスはさすが諜報機関の幹部だけあって、騙し合いに強い。したがって、あれほど疑われていたアランがソ連の二重スパイでないことは既にわかっていただけでなく、二重スパイは某氏だ、ということまでしっかり把握した。その上で、ソ連のスターリンに流すべき情報まで計算していたようだから、すごい。

「嘘つきは泥棒の始まり」と言われ、日本では嘘つきは悪いことの代表格だが、本作を観ているとその価値観が大きく揺らぐことはまちがいない。ゲームは騙し合い。したがって、ゲームに強くなるためには、人を騙すことにうまくなるのが大切。それと同じように、戦争における情報戦は究極の騙し合い。したがって、戦争に勝つためには、よりうまく相手を騙すことが大切。そういうことなのだ。

## ■□■戦争終結は2年間早まった。しかし、次の大戦では？■□■

スクリーン上にみる、アランが開発した暗号解読機“b o m b e”（今でいうコンピューター）の構造は実に興味深い。手作りの巨大な機械にスイッチが入ると、ガタガタと音を立てて一斉に動き始める様子を見ると胸がワクワクしてくるが、本作前半ではそれがなかなか機能しないためにチームを襲う苦悩が描かれる。数学の苦手な私にはよくわからないが、エニグマが解読不可能と言われた理由は、その組み合わせの数にあったようだ。その数は、159のあとに0が18個続き、1日24時間週7日かけても、全部を調べ終わるまでに2000万年かかるというもの。しかも、ドイツ軍は1日の発信を終えると、毎晩0時に設定を変えてしまうから、その解読はやっかいだ。それを前提として、アランが開発した暗号解読機“b o m b e”にアランが求めた才能とは・・・？

しかして、21世紀の今は、アランが開発した“b o m b e”の能力は小型ノートパソコンやスマホで十分発揮できるから時代は変わったものだ。しかし、今や世界戦争は大砲や軍艦、ミサイルや核以上にサイバー戦のウエイトが大きくなっている。核弾頭を積んだミサイルが現実は何十発も何百発も大陸間を飛び交ったら、世界の多くが滅亡するのは当然だが、そこまでやらなくても、21世紀の戦争（＝情報戦）のメインはサイバー戦にある。しかして、そのレベルが1番高いのはアメリカ？それとも中国？そして日本はどのレベルにあるの？

特定秘密保護法の問題点を言い立てるのも結構だが、今や究極の問題はそんなところまでできているのでは・・・？そんなことも考えながら、アカデミー賞の「作品賞、主演男優賞、助演女優賞、脚色賞等の受賞確実！」と思える本作を、しっかり鑑賞したい。

2015（平成27）年1月19日記